

優秀賞



「届ける、伝える」

宮城県気仙沼市立新月中学校

三年 藤原 藍

春四月。私の所属する吹奏楽部に新しい顧問の先生がやってきた。大好きだった前の顧問の先生が教えてくれた。新しい先生は、関東の音楽大学を卒業した二十三歳の男性。学生時代から、復興支援の音楽活動をしている優秀な先生。私たちは興奮を隠せなかった。

新しい先生との初対面の日。ステージに上がった先生を見て私は内心「ん？」と思った。抱いていたイメージとはまったく違う、小柄で細身。まだまだ少年です、みたいな先生だ。

一年生が入部する少し前、先生は私たちに「コンクールの目標を決めましょう。」

とおっしゃった。私を含めた三年生全員、「県大会銀賞以上」を掲げた。すると先生が一言、「レベルが低くないですか？」

と言った。正直県大会に行ったとしても、例年「銅賞」が当たり前だった私たちにとって、レベルが低いどころか「銀賞」は高い壁だった。けれどもいつの間にか、先生におだてられ、はやしたてられ誘導され、私たちの目標は「東北大会出場」と決まってしまうていた。

数日後、先生からコンクールで演奏する候補曲の楽譜が渡された。それは、中学生のレベルをはるかに

に超えた難曲だった。先生、正気か。そして、この曲を選んだ理由を聞く私たちに向かって涼しい顔で一言。

「簡単だからです。」

あせんとする私たちを無視して、先生は続けた。

「コンクールの選曲は、皆さんに任せます。これまでの候補曲と合わせて、皆さんが挑戦したい曲を選んでください。」

私は知っている。先生の中でこの曲はもう決定事項。あとはまた、私たちをうまく誘導してしまうのだ。見た目は素朴で柔和な少年みたいな先生。しかし、その目は「ギラギラ」という擬態語がびつたりだ。きつと、ものすごい野望を抱いているに違いない。

「東北大会出場」という言葉は、私たちに重くのしかかった。が、それと同時に、何とも言えない気持ち。足元からせり上がってくる感覚を覚えた。(この先生に本気でついていったら、私たちはどこまでいけるのだろうか。)あの時の心の高ぶりは今でも忘れられない。

それから一年生も交え、本格的に部活動が動き出した。前顧問の先生が築いてくださった土台に加え、先生が教えてくださった豊富な技術や知識で、効果的な練習や合奏ができた。

それにしても、先生は音楽以外のことはさっぱりだ。物を置きっ放しにして、いつも大騒ぎで探している。私たちはすかさずそれを指摘する。それが楽しくて仕方がなかった。それでも先生がひとたび指揮棒をもって、あの「ギラギラ」の目をする周囲の空気がピンと張り詰める。私はその瞬間がたまらなく好きなのだ。

七月末。第一の壁である吹奏楽コンクールの地区大会を通過した私たちは、休む間もなく二週間後に迫る県大会の練習を始めた。その頃になると、先生の指導はいつそう厳しくなり、楽器を吹くことがど

うしようもなく辛く苦しくなった。先生は言う。「聴いてくれる人のことをもっと考えて。みんなは、何を伝えたいの？」

いつも同じだ。ああ、音楽で何かを届けるというのは、なんて難しいのだろう。自分たちの力量不足が情けなかった。そして、そんな私たちを奮い立たせたのも先生だった。

「先生は東北大会出場を諦めていません。だから、皆さんも最後まで頑張りましょう。」

先生にそんなふうに言われたら、頑張らないわけにはいかない。

そして、これまでのすべてをぶつけた県大会。銀賞だった。「銀賞」。私たちの胸に広がったのは、心からの悔しさだった。けれどもなぜか、その悔しさが心地良かった。私たちはいつの間にか、本気で東北大会出場を目指していたのだ。そんな私たちに先生は、

「皆さん悔しいでしょう。目標が当初の、『県大会銀賞』だったら、今頃喜んでいたと思います。でも、東北大会出場を本気で目指したことは、大きな財産になったはずですよ。次はもっと上を目指せる。三年生が積み上げてきたものは、これからも続いていきます。」

三年間頑張ってきた良かったと、心から思えた瞬間だった。

音楽に限らず、人に何かを届けたり伝えたりするのは容易ではない。けれども、その何かが届いたとき、それが誰かの大切なものになるのかもしれない。先生の熱い思いは、確かに私たちに届いて伝わった。高い目標に向かって頑張った充実感。県大会で銀賞を頂けたという自信。そして楽しかった思い出。

私も、誰かの大切なものに繋がる何かを、届けることができるかもしれない。

そう信じて、毎日毎日を過ごしていきたい。